

フランス語とコルシカ語における未来諸時制の対照研究

渡邊 淳也

1. はじめに¹

本研究の目的は、フランス語とコルシカ語の未来諸時制を対照し、相違を明らかにすることである。具体的には、つぎのような形式が対象となる。例示はフランス語 chanter、コルシカ語 cantà（いずれも「うたう」）による。

- ・フランス語の単純未来形：je chanterai, tu chanteras, il chantera, nous chanterons, vous chanterez, ils chanteront
- ・フランス語の迂言的未来形（<aller+不定法>）：je vais chanter, tu vas chanter, il va chanter, nous allons chanter, vous allez chanter, ils vont chanter
- ・フランス語の前未来形（完了助動詞の単純未来形+過去分詞）：j'aurai chanté, tu auras chanté, il aura chanté, nous aurons chanté, vous aurez chanté, ils auront chanté
- ・コルシカ語の単純未来形：canteraghju, canterai, canterà, canteremu, cantere, canteranu（ただし方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている）
- ・コルシカ語の迂言的未来形（<avè da+不定法>）：aghju da cantà, hai da cantà, hè da cantà, avemu (emu) da cantà, avete (ete) da cantà, hanu da cantà（かっこ内はもとの形とならんで用いられる助動詞の短縮形。また、他の方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている）
- ・コルシカ語の前未来形（完了助動詞の単純未来形+過去分詞）：averaghju cantatu, averai cantatu, averà cantatu, averemu cantatu, averete cantatu, averanu cantatu（方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている）

これ以外の形式については、フランス語、コルシカ語のいずれか一方で未来諸時制を用いているとき、他方の言語の対応部分に生起する叙法・時制のみを考察の対象とする。

両言語の迂言的未来形は成り立ちがことなる。フランス語は aller「行く」を用いるのに対し、コルシカ語は avè「もつ」を用いる。したがって、コルシカ語の迂言的未来形は元来、イタリア語の<avere da+不定法>、フランス語の<avoir à+不定法>、スペイン語の<haber de+不定法>に類する《義務》の表現であったと思われるが、（すくなくとも、圧倒的多数の例では）迂言的未来形として文法化している。

また、両言語の迂言的未来形のもうひとつの大きな相違として、フランス語では迂言的未来形は aller を現在形、半過去形にしかおけないのに対し、コルシカ語では時制がはるかに自由である。ここでは、フランス語に関しては aller が現在形のもの、そしてコルシカ語については avè を現在形においたもののほか、今回の調査の範囲内で見られた、

¹ 本稿は、科学研究費 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者：山村ひろみ)、同 (C) JP-22K00615 (研究代表者：和田尚明)、ならびに同 (C) JP-20K00565 (研究代表者：渡邊淳也) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。

avè を単純未来形において迂言的未来形（例：averaghju da cantà, averai da cantà, averà da cantà, averemu da cantà, averete da cantà, averanu da cantà およびそれらの方言的ヴァリアント）も対象とする。

先行研究、たとえば Gaggioli (2012, p.180) は、フランス語の迂言的未来形とコルシカ語の迂言的未来形を対応させることが多い（« On fait souvent correspondre ce futur à *aller + infinitif en français* »）と指摘しているが、あとでみると、両言語の迂言的未来形は実態としてはあまり対応していない。

2. コーパス調査

Prosper Mérimée の小説 *Colomba* のフランス語（=原作）・コルシカ語対訳版（Ghjuvan Battistu Paoli 訳、CANOPÉ [=Réseau de création et d'accompagnement pédagogiques] 2016 年刊行、各言語とも約 47,000 語）をコーパスとして用いて、ふたつの言語のうち少なくとも一方で未来諸時制を用いている文、ならびにそれらの文の他方の言語での対訳をすべて収集した。その結果はつぎの表 1 のとおりであった。収集した例文数としては 390 例 ×2 言語で 780 例ある。

表 1：フランス語・コルシカ語における未来諸時制と対応する叙法・時制²

フランス語	コルシカ語	生起数	前未来形	単純未来形	2
単純未来形	単純未来形	174	複合過去形	単純未来形	3
現在形	単純未来形	53	命令法	単純未来形	3
単純未来形	迂言的未来形	32	単純未来形	迂言的未来形×単純未来形	2
単純未来形	現在形	15	単純未来形	命令法	2
迂言的未来形	迂言的未来形	14	迂言的未来形	現在形	2
複合過去形	前未来形	13	単純未来形	半過去形	1
対応個所なし	単純未来形	11	単純未来形	前未来形	1
条件法現在形	単純未来形	8	単純未来形	接続法半過去形	1
単純未来形	対応個所なし	8	迂言的未来形	単純未来形	1
現在形	迂言的未来形	7	迂言的未来形	迂言的未来形×単純未来形	1
前未来形	前未来形	8	迂言的未来形	命令法	1
現在形	前未来形	6	現在形	迂言的未来形×単純未来形	1
半過去形	前未来形	6	接続法現在形	単純未来形	1
単純未来形	条件法現在形	5	接続法現在形	前未来形	1
条件法現在形	迂言的未来形	5	合 計		

つぎに、表 1 を母数として再集計し、フランス語で未来諸時制を用いている例、コル

² 「対応部分なし」と分類したのは、(i) 定形動詞が使われていない場合、(ii) 文構造がまったくことなる訳である場合、(iii) 訳文が抜けている場合、の 3 つである。

シカ語で未来諸時制を用いている例のそれぞれからみた場合、対訳言語でどのような形式を用いているかを示すと、それぞれ表2、3のようになる。

表2：フランス語の未来諸時制から
みた集計（時制ごとに整序）

フランス語	コルシカ語	生起数
単純未来形	単純未来形	174
	迂言的未来形	32
	現在形	15
	対応個所なし	8
	条件法現在形	5
	迂言的未来形 ×単純未来形	2
	命令法	2
	半過去形	1
	前未来形	1
	接続法半過去形	1
迂言的未来形	迂言的未来形	14
	現在形	2
	単純未来形	1
	迂言的未来形 ×単純未来形	1
	命令法	1
前未来形	前未来形	8
	単純未来形	2
合 計		270

表3：コルシカ語の未来諸時制から
みた集計（時制ごとに整序）

コルシカ語	フランス語	生起数
単純未来形	単純未来形	174
	現在形	53
	対応個所なし	11
	条件法現在形	8
	複合過去形	3
	命令法	3
	前未来形	2
	迂言的未来形	1
	接続法現在形	1
	単純未来形	32
迂言的未来形	迂言的未来形	14
	現在形	7
	条件法現在形	5
	複合過去形	13
前未来形	前未来形	8
	現在形	6
	半過去形	6
	単純未来形	1
	接続法現在形	1
迂言的未来形× 単純未来形	単純未来形	2
	迂言的未来形	1
	現在形	1
合 計		355

以上から観察できることは、第1に、フランス語の未来諸時制の生起総数が270例と少なく、コルシカ語が355例と多いということである。この理由としては、コルシカ語の未来諸時制のほうが用法の幅が広く、とくにモダールな用法が充実しているためであると思われる。

第2に、両言語の単純未来形どうしが対応する場合が圧倒的に多いのにくらべて、迂言的未来形は、生起数のうえでも対応しているのは少数にとどまるということである。とくにコルシカ語の迂言的未来形からみた場合、フランス語の迂言的未来形が対応するのは、58例中14例にすぎないことは特筆にあたいする。

3. 単純未来形を中心とする対照分析

本節ではフランス語またはコルシカ語で単純未来形が用いられている事例について、注目にあたいる代表的な用法の例文を観察するとともに、分析を行なう。また、前節では統計化の対象とはしなかったが、対比のため、*Colomba* のイタリア語訳書 (Ottone Bacaredda 訳、Head & Line 2014 年刊行) も参照する³。以下ではフランス語を仏、コルシカ語を科、イタリア語を伊と略することがある。

3.1. 兩言語とも単純未来形を用いる場合

上記で観察したとおり、この事例がもっとも多い。該当する用法は以下のようなものである。まず、事行を未来時に位置づける時間的用法がある。

- (1) 仏 Je souffre beaucoup de chanter ainsi. Cela me rappelle tous nos malheurs. Demain j'en serai [单未]⁴ malade ; mais il le faut. (対訳書 p.182)
科 Straziu assai à cantà in simule uccasione, chì mi face vene in mente tutti i nostri guai. Dumane, ne saraghju [单未] malata ; ma ci vole. (対訳書 p.183)
伊 Mi è doloroso il cantare, perché mi ricorda ogni nostra sventura : domani io ne sarò [单未] malata, ma bisogna che io canti. (伊訳書 p.110)
あんなふうに（挽歌を）歌うのはとても苦しいのです。わたしたちのあらゆる不幸を思い出しますから。そのせいで、明日は病気になるでしょう。でも歌わなくてはなりません。

(1) で単純未来形におかれた事行には、なにほどの不確実性もあるので、推量的な意味も排除はできないが、仏 demain、科 dumane 「明日」という時間副詞と共に起しているため、未来時指示の意味が前面に出ているといえる。ただし、未来時指示の時間副詞と共に起する場合、フランス語の単純未来形がコルシカ語の迂言的未来形に対応している例も多い。

また、時制的用法の亜種ともいえそうな、仏 espérer、科 sperà 「期待する」のあとにくる補足節中の単純未来形も、両言語で対応している（ただしここでは、規範的には接続法を要求するはずの伊 sperare のあとでも単純未来形がもちいられている）。

- (2) [リディアからコロンバへの手紙] 仏 En allant nous embarquer à Bastia, nous comptons vous demander l'hospitalité, et j'espère que le château della Rebbia, que vous dites si vieux et si délabré, ne s'écroulera [单未] pas sur nos têtes. (対訳書 p.208)

³ イタリア語には規範的には迂言的未来形が存在しないことになっている。ただし、Alida Maria Siletti 氏の Chronos 12 (2016 年 6 月 15~17 日、於 Caen 大学) での発表によると、近年の新傾向として、<andare + a + 不定法> で未来をあらわす用法が話しことばで見られるとのことである。« Queste cifre vanno ad indicare... » (これらの数字は...を示すこととなる) のように、結果用法 (risultativo) が見られることが特徴的である。

⁴ 例文中で用いた記号はつぎのとおり。[現] 現在形、[单未] 単純未来形、[迂未] 迂言的未来形、[迂未×单未] 助動詞を単純未来形において迂言的未来形（コルシカ語のみ）、[前未] 前未来形、[複過] 複合過去形（イタリア語文法では近過去形 passato prossimo というが、用語を統一した）、[单過] 単純過去形（イタリア語文法では遠過去形 passato remoto というが、用語を統一した）、[半過] 半過去形、[条現] 条件法現在形。

科 Andendu ad imbarcà ci in Bastia, cuntemu di chere vi l'alloghju, è u palazzu della Rebbia, s'ellu hè cusi vechju è malandatu ch'è vo dite, **spergu** ch'ellu ùn ci **falarà** [单未] micca in capu. (対訳書 p.209)

伊 Imbarcandoci per Bastia facciamo conto di chiedervi ospitalità, ed io **spero** che il castello della Rebia, che voi dite così vecchio e distrutto, non **diroccherà** [单未] sulle nostre teste. (伊訳書 p.127)

バスティアから乗船するのですが、その前に泊まさせていただくことをあてにしております。おっしゃるところでは、デッラ・レッビア城はかなり老朽化しているそうですが、わたしたちの頭上にくずれて来ないことを希望しております。

つぎに、意思をあらわす用法のときは、フランス語・コルシカ語でもっともよく一致して単純未来形を用いている。

(3) 仏 [...] je vous préviens que, si M. Barricini abuse de son autorité de maire pour me faire arrêter, je me **défendrai** [单未]. (対訳書 p.232)

科 [...] vi privengu chì s'è u sgiò Barricini abusa di a so auturità di merri par fà mi arristà, mi **difindaraghju** [单未]. (対訳書 p.233)

伊 [...] vi avviso che se il signor Barricini abusa della sua autorità di sindaco per farmi arrestare, io mi **difenderò** [单未]. (伊訳書 p.137)

言っておきますが、もしバッリチーニ氏がわたしを逮捕するために村長の権力を濫用するなら、わたしは抵抗しますよ。

しかし、この場合はたまたま「意思をあらわす」という結果が一致しただけで、フランス語とコルシカ語の単純未来形は基本的な機能がことなると考えている。その差異は、このあと徐々に明らかになってくるので、あとでまとめることにする。

3.2. フランス語のみで単純未来形を用いる場合

つぎに、フランス語のみで単純未来形を用いる場合を見よう。

まず、フランス語の単純未来形にコルシカ語の迂言的未来形が対応する場合である。

(4) 仏 Mademoiselle en **aura** [单未] bien de la joie, dit Chilina, et elle **sera** [单未] bien fâchée de vous savoir blessé, Ors'Anton'. (対訳書 p.276)

科 Hè a signora Culomba chì **hà da esse** [迂未] cuntenta, mì ! disse Chilina, è **sarà** [单未] bella cuntrariata di sapè vi firitu, o Orsu Antò. (対訳書 p.277)

伊 Madamigella ne **avrà** [单未] molto piacere — disse Chilina — e **sarà** [单未] ben dolente di sapervi ferito, signor Orso. (伊訳書 p.158)

キリーナが言った。「お嬢さまがおよろこびになるでしょう。でも、お怪我をなさったと知つたら心配なさるでしょう、オルス・アントーネさん。」

(4) の第 1 の生起は、フランス語では単純未来形を用いているところで、コルシカ語では迂言的未来形を用いている。文内容からして、いっそう時間的な用法のときにコル

シカ語では迂言的未来形を用いることが多く、同じ未来時の事態を対象としていても、推測をふくむなど、モダールな色彩が強いときほどコルシカ語で単純未来形があらわれやすいようである。つぎの例でも同様である。

- (5) 仏 — Que pensera [单未]-t-on de moi ? disait tout bas Miss Nevil.
— On pensera [单未] que vous vous êtes engagée dans le maquis, voilà tout.
— Que dira [单未] le préfet ?... que dira [单未] mon père surtout ?
— Le préfet ?... vous lui répondrez [单未] qu'il se mêle de sa préfecture. (対訳書
p.326)

- 科 — Ma chì anu da pinsà [迂未] di mè ? dicia sottu voce Miss Nevil.
— Anu da pinsà [迂未] ch'è vo avete pigliatu a machja, puntu è basta.
— È chì diciarà [单未] u prifettu ?... è anzi tuttu chì diciarà [单未] babbu ?
— U prifettu ?... Li rispondarete [单未] ch'ellu s'impachji di l'affari prifitturali.

(対訳書 p.327)

- 伊 — Che penserà [单未] mio padre ? — disse a bassa voce miss Nevil.
— Penserà [单未] che vi siete smarrita in una macchia, ecco tutto.
— Che dirà [单未] il prefetto ? Che dirà [单未] mio padre, soprattutto ?
— Il prefetto ? Voi li respondarete [单未] che si incarichi della sua prefettura.

(伊訳書 p.184)

「みんなわたしのことをどう思うでしょう」とネヴィル嬢が小声で言った。

「マキ [灌木林] のなかで迷ったと思うでしょう。それだけですよ」

「知事はどう言うでしょうか。それに特に、父はなんと言うでしょう」

「知事？ 知事には、自分の県庁のしごとをしておきなさいと答えればいいでしょう」

(5) では、フランス語では5つの生起で連續して単純未来形を用いているのに対して、コルシカ語でははじめの2つの生起が迂言的未来形である。この例の文脈を見ると、コロンバとネヴィル嬢が軍に連行されるときであり、すぐに知事や大佐(ネヴィル嬢の父)とも会うことになることがわかっているので、もっぱら時間的なはじめの2つの生起を、コルシカ語では迂言的未来形においているのである。それに対し、より後のなりゆきを推測するときにはコルシカ語でも単純未来形を用いている。

つぎに、フランス語の単純未来形にコルシカ語の現在形が対応している例をみよう。

- (6) 仏 Mon frère, dit-elle, je vous **prierai** [单未] de sortir avec moi. (対訳書 p.156)
科 O fratellumu, disse, vi **pregu** [現] di esce cù mecu. (対訳書 p.157)
伊 Fratello – ella disse – vi **pregherei** [条現] di sortire con me. (伊訳書 p.96)
彼女は言った。「兄さん、お願ひです、いつしょにきてください」

渡邊・小川 (2018, p.70) でも指摘したように、全般的にはモダールな用法が衰退しているフランス語の単純未来形において、語調緩和用法はやや例外的に盛んにもちいられている。フランス語のこの用法においては、渡邊 (2014 a, p.142) でものべたように、発言動詞や遂行動詞が単純未来形におかれていることによって、それらの動詞が発動する

言語行為が未来方向へと擬制的に遅滞させられ、対話者の了承を待つ時間的間隙が生じるということから、語調緩和の意味効果が出てきている。つまり、広い意味で未来性を看取できる用法である。

同様の用法で、フランス語では単純未来形、コルシカ語では条件法現在形を用いている例もある。

- (7) 仏 Vous êtes galant, monsieur le sergent, dit Colomba, mais vous ne **ferez** [単未] pas mal de faire attention à vos paroles. (対訳書 p.324)
- 科 Sete po galantomu, o sgiò sargente, disse Culomba, ma megliu **saria** [条現] à fà casu à ciò ch'è vo dite. (対訳書 p.325)
- 伊 Voi siete galante, signor sergente — riprese Colomba — ma non **farete** [単未] male di badare alle vostre parole. (伊訳書 p.183)

お優しいのですね、軍曹さん。でも、ことばに気をつけたほうがいいですよ。

(7) でもフランス語の単純未来の語調緩和用法がみられる。フランス語とコルシカ語で同じ構文を使っていないので、直接の比較はできないものの、コルシカ語においても語調緩和という点は共通しており、そのために条件法が用いられている。

この節の最後に、コルシカ語で、迂言的未来形の助動詞 *avè* を単純未来形において用いている例を見ておこう。

- (8) 仏 Mais il est tard !... Et votre frère, que **pensera** [単未]-t-il de moi ? (対訳書 p.308)
- 科 Ma hè tardi !... È vostru fratellu, chì **avarà da pinsà** [迂未×単未] di mè ? (対訳書 p.309)
- 伊 Ma è così tardi !... E vostro fratello che **penserà** [単未] di me ? (伊訳書 p.175)

もう夜遅いんですよ！それに、あなたのお兄さんは、わたしのことをどうお思いになるでしょう？

コルシカ語においては、迂言的未来形だけでは純然たる未来時指示にしかならないのに対し、ここでは『推量』(conjecture)⁵ のニュアンスがつけ加わっており、そのことを助動詞 *avè* を単純未来形におくことで示していると思われる。

3.3. コルシカ語のみで単純未来形を用いる場合

コルシカ語のみで単純未来形を用いる場合でもっと多いのは、コルシカ語では現在推量をあらわす単純未来形に、フランス語では法動詞 (verbes modaux) の現在形が対応する場合である。つぎの例の最初の生起 (Que **doit** penser... / Cosa **pinsarà**...) がこれに該当する⁶。

⁵ 『推量』については、つぎの節と、Squartini (2008)、Popescu (2015) を参照。Squartini、Popescu は『状況からの推論』(inférence circonstancielle; 発話状況に具体的な根拠がある推論)、『総称的推論』(inférence générique; 一般知識からの推論) と『推量』(conjecture; 状況、一般知識のどちらの根拠も欠く推論) をわけている。

⁶ Kronning (1996, p.143) の説では、*devoir* の認識的用法は全体疑問とも部分疑問とも相容れないはずであるが、ここでは認識的 *devoir* が全体疑問と両立しているように見える。

(9) 仏 Que doit [現] penser de moi ce jeune homme ? dit-elle, et moi que pensé [現] -je de lui ?
(対訳書 p.118)

科 Cosa pinsarà [単未] di mè issu giuvanottu, disse, ed eiu, cosa pinsaraghju [単未] d'ellu ?
è parchè ci pensu ?
(対訳書 p.119)

伊 Che dovrà [単未] pensare di me, quel giovane ? — si domandò — Ed io, che ho [現] a
pensare di lui ?
(伊訳書 p.78)

彼女は言った。「あの若い男はわたしのことをどう思っているのかしら。そしてわたしも、彼
のことをどう思っているのでしょうか」

この現象は、渡邊 (2009)(2014 a)(2019) でものべたように、標準的なフランス語では、
単純未来形のモダールな用法が衰退していることに由来するものと思われる。つまり、
かつては (10) のように単純未来形によってあらわされることもあった現在推量が、
devoirなどの法動詞によってあらわされるようになったのである。

(10) Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu, ce sera [単未] pour M^{me} Rousseau.
(Proust, *À la recherche du temps perdu*, vol.1, p.84)
だれのために死者の鐘がなったのかしら？ あっ、まあ、ルソー夫人のためでしょうね。

(9) にもどって、第2の生起 (que pensé-je... / cosa pinsaraghju...)について考えてみよう。
コルシカ語のみで単純未来形が用いられているのは、疑問文中で、《推量》にむすびついているからであると思われる⁷。

《推量》とむすびついた疑問とはなにかというと、日本語でいえば、「...だろうか」の
ような形式に対応する。三宅 (2010) はつぎのような例を引き、

(11) 「十ラウンド、続かないでしょうか...」「わからない。これ、誰にもわからない。内
藤、走りました。二月から走って、そとの体よくなつた。でもなかの体、僕にもわ
からないよ」
(三宅 2010, p.64)

「...だろうか」型形式を「弱い質問」をあらわすとしている。「弱い質問」は、通常の質
問とちがって、「聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問」(ibidem, p.63) である。つ
まりは、それだけ不確定性が高い《推量》がはたらいているということである⁸。

つぎに、コルシカ語の単純未来形に対し、フランス語では条件法現在形を用いている
例である。

(12) 仏 Pendant que vous chasseriez [条現], je dessinerais [条現] ; je serais charmée d'avoir
dans mon album la grotte dont parlait le capitaine Ellis, où Bonaparte allait étudier quand
il était enfant.
(対訳書 p.14)

⁷ フランス語の単純未来形の推量用法は、歴史的な衰退を経て、わずかに使われる場合でも動
詞がほぼ avoir、être に限られるのに対し、(9) では pinsà 「考える」が使われており、コルシカ
語単純未来形の推量用法はフランス語にくらべて動詞の制約がゆるいと思われる。

⁸ この種の疑問文については、さらに Fălăuș et Laca (2014)、Ippolito et Farkas (2021) を参照。

科 Mentre ch'è vo **caccighjarete** [单未], eiu **disignaraghju** [单未] ; mi garbaria d'avè in lu me quaternu quella grotta ch'ellu discrivia u capitantu Ellis, duv'ellu andava à studià Bonaparte da zitellu. (対訳書 p.15)

伊 Mentre voi **cacciarete** [单未], io **disegnerò** [单未]. Io sarò felice di possedere nel mio Album la grotto di cui parlò il capitano Ellis, dove Bonaparte andava a studiare essendo fanciullo. (伊訳書 p.22)

「あなたが狩りをしているあいだに、わたしは写生をすればいいのです。エリス大尉が話しておられた、ナポレオンが子どものころに勉強しに行った洞窟を、わたしのスケッチブックにおさめたいものです」

(12) の仮では Togeby (1985, vol.2, p.390) のいう「夢想の条件法」(conditionnel du rêve) が用いられている。フランス語では、条件法を複数回用いるだけで、一連の夢想を言いあらわすことができる。これに対し、科では、条件法の使用範囲はフランス語よりもせまく、なにほどの非現実性(語調緩和をふくむ)や、言説の他者性がある場合でないと使いづらいようである。

最後に、統計上の扱いとしては仮の複合過去形がくる例を見ておこう。

(13) 仮 Nous **avons fait** [複過] de plus mauvais repas ensemble du temps de notre pauvre compatriote qu'on a réformé. (対訳書 p.166)

科 Un **sarà** [单未] micca pegħju cà uni pochi di quiddi ch'è no fecimi insemini tempu di un nostro corciu di cumpatriottu ch'eddi t'ani rifurmatu. (対訳書 p.167)

伊 **Abbiamo fatto** [複過] insieme dei pasti più cattivi, al tempo del nostro povero compatriota che anno riformato. (伊訳書 p.102)

免役除隊にされたかわいそうな同国人の時代には、もっとまずい食事をいっしょに食べたものです。

この例は、仮では事態をえがき出すために複合過去形を用いているが、科では事態を直接えがくのではなく、その特徴づけをのべており、かつ《推量》の単純未来形を用いているので、一見したところ相違が出てきている。

元来完了相の事態を、特徴づけを介して状態相でとらえかえす現象を、渡邊 (2012) (2014 b) (2021) では「叙想的アスペクト」(aspect de dicto) と名づけて考察したが、この例のコルシカ語においても、叙想的アスペクトが機能していると考えることができる。

4. 迂言的未来形を中心とする対照分析

本節ではフランス語またはコルシカ語で迂言的未来形が用いられている事例について、注目にあたいる用法の代表的な例文を観察するとともに、分析を行なう。例文の引用と観察の要領は3節と同様である。

4.1. 両言語とも迂言的未来形を用いる場合

2節で観察したとおり、フランス語で迂言的未来形を用いている箇所を母数とすると、

コルシカ語でも迂言的未来形を用いているのは 19 例中 14 例 (73.7%) であるが、逆にコルシカ語で迂言的未来形を用いている箇所を母数とすると、フランス語でも迂言的未来形を用いているのは 58 例中 14 例 (24.1%) と少数派になる。両言語の迂言的未来形には明確な相違があることがわかる。

ここでは両言語で迂言的未来形を用いている場合を見ておこう。

- (14) 仏 Souvenez-vous de ce que je **vais** vous **dire** [迂未], voisin, ajouta un vieillard qui était l'oracle du bourg. (対訳書 p.136)
- 科 Invinite vi ghjà di ciò ch'e v'**aghju da dì** [迂未], o caru vicinu, aghjunse un vechju chì era u saviu di u paese. (対訳書 p.137)
- 伊 Vi ricordate — aggiungeva un vecchio che era l'oracolo del borgo —di ciò che altra volta vi **dissi** [単過；誤訳と思われる]? (伊訳書 p.86)
「隣人よ、いまから言うことをおぼえておきなさい」と村の預言者である老人がつけ加えた。

この例のように、直後になされる行為をさす時間的用法の場合、両言語でそろって迂言的未来形が用いられる。つぎの例も同様である。

- (15) 仏 Je **vais te donner** [迂未] un pain pour lui et de la poudre. (対訳書 p.144)
- 科 Li **aghju da dà** [迂未] pane è polvara. (対訳書 p.145)
- 伊 Ti **darò** [単未] del pane e dalla polvere per il tuo zio ? (伊訳書 p.90)
叔父さんのためのパンと、火薬をさしあげましょう。

4.2. フランス語のみで迂言的未来形を用いる場合

つぎに、フランス語のみで迂言的未来形を用いる場合について検討しよう。

まず、仏の迂言的未来形に科の単純未来形が対応する例をみよう。

- (16) 仏 Il paraît que l'air de votre île ne donne pas seulement la fièvre, mais qu'il rend fou. Heureusement que nous **allons** bientôt la **quitter** [迂未]. (対訳書 p.108)
- 科 Pare chì l'ariaccia chì soffia in Corsica, ùn solu di dà e frebbe, mantachehji a ghjente. Ancu assai ch'è no ùn **staremu** [単未] tantu ad andà ci ne. (対訳書 p.109)
- 伊 Pare che l'aria della vostra isola non dia solo la febbre, ma che faccia divenir pazzi. Meno male che non **staremo** [単未] molto ad abbandonarla. (伊訳書 p.71)
あなたの島の空気は、熱病を起こすだけでなく、ひとを狂わせるそうです。さいわい、まもなく島を発ちますが。

この例では、近接未来的な意味は、科では<ùn stà tantu à + 不定法> 「ほどなく～する」という表現によって担われている。動詞 stà が単純未来形におかれているのは、「島を発つまで、いくばくもないでしょう」という《推量》のためであると思われる。

つぎに、仏の迂言的未来形に科の現在形が対応する例を検討しよう。

- (17) 仏 Que de belles choses ! s'écria Colomba. Je **vais** bien vite les **serrer** [迂未] de peur

- qu'elles ne se gâtent. (対訳書 p.152)
- 科** Mì tanta robba bella ! si smaravigliò Culomba. E **vogliu** [現] cautà subbitu ch'elle ùn si guastinu. (対訳書 p.153)
- 伊** Quante belle cose ! — gridò Colombia — **Corro** [現] subito ad allogarle perché non ci sciupino. (伊訳書 p.94)
コロンバはさけんだ。「なんと多く美しいものがあることでしょう！ だめにしないように、急いでしまっておきます」

(17) のコルシカ語版では、現在形ではあるが、法動詞である **vulè** 「欲する」が用いられており、**仮**の迂言的未来形の意味を、部分的に肩がわりしていると思われる。

特徴的な事例として、**仮**の迂言的未来形が、**科**の迂言的未来形の助動詞 **avè** が単純未来形におかれた形に対応している例文をみよう。

- (18) **仮** Vous **allez être** [迂未] bien fait de m'avoir fait remplir les quatre pages ; mais je m'ennuie, monsieur, je vous le répète, et, par cette raison, je vous permets de m'écrire très longuement. (対訳書 p.210)
- 科** V'avarete da imbuffà [迂未×单未] d'avè mi fattu empie issi quattru fogli ; ma m'annoio o sgiò della Rebbia, a vi tornu à dì, è, parciò, mi parmettu di scrive tantu. (対訳書 p.211)
- 伊** Voi mi **giudicherete** [单未] ben balorda di riempire le quattro pagine, ma io mi annoio, signore, ve lo ripeto, e per questa ragione vi permetto di scrivermi assai lungamente. (伊訳書 p.127)

あなたはわたしに4ページものの手紙を書かせたことで、いい気分になられるでしょう。しかし、くりかえしますが、わたしは退屈しております。なので、わたしあてにも長いお手紙をくださってかまいません。

この例では、3.2節の(8)の例と同じく、コルシカ語においては、迂言的未来形だけでは純然たる未来時指示にしかならないのに対し、《推量》のニュアンスがつけ加わっているために、助動詞 **avè** が単純未来形におかれていると思われる。

4.3. コルシカ語のみで迂言的未来形を用いる場合

つぎに、コルシカ語のみで迂言的未来形を用いる場合について検討しよう。例(19)は例(4)の再掲である。

- (19) **仮** Mademoiselle en **aura** [单未] bien de la joie, dit Chilina, et elle **sera** [单未] bien fâchée de vous savoir blessé, Ors'Anton'. (対訳書 p.276)
- 科** Hè a signora Culomba chì **hà da esse** [迂未] cuntenta, mì ! disse Chilina, è **sarà** [单未] bella cuntrariata di sapè vi firitu, o Orsu Antò. (対訳書 p.277)
- 伊** Madamigella ne **avrà** [单未] molto piacere — disse Chilina — e **sarà** [单未] ben dolente di sapervi ferito, signor Orso. (伊訳書 p.158)
キリーナが言った。「お嬢さまがおよろこびになるでしょう。でも、お怪我をなさったと知ったら心配なさるでしょう、オルス・アントーネさん。」

全般的に、時制的用法においては、コルシカ語の迂言的未来形の使用は、フランス語では単純未来形を用いる領域に大きくひろがっている。このことが統計上の差異をもたらしている。

コルシカ語における迂言的未来形の使用の拡大について、Casta (2003) はつぎのように言っている。

« Il est vrai qu'en français aussi dans la langue familière la périphrase « aller + infinitif » tend à prendre la place du futur (Baylon et Fabre 1978, p.126) mais le corse va nettement plus loin, nous semble-t-il (cf. *Hà da vene un ghjornu...* dont « l'équivalent périphrastique » serait très difficilement acceptable en français). » (Casta 2003, p.75)

「フランス語でも、くだけたことばでは<aller+ 不定法>が単純未来形にとってかわる傾向にあることは確かであるが、コルシカ語は明確にもっと先まで行っているように思われる (*Hà da vene un ghjornu...* 「...という日がいつか来る」のような文の「迂言的未来形による対応物」はフランス語では受けいれがたい)。」

つまり、仮では迂言的未来形は「いつの日か」というような不定の未来時には適用しやすい⁹ のに対し、科ではそこまで迂言的未来形の用法がひろがっているのである。

しかし、科の迂言的未来形が未来時指示の用法のみに特化しているわけではない。つぎの例は、仮では《義務》の表現である *falloir* がもちいられている（したがって、統計上は仮を現在形に分類している）ところで、科では迂言的未来形が用いられている。これはコルシカ語の<*avè da* + 不定法>が、その原義であった《義務》の標示をも、なお担いつづけていることを示している¹⁰。

- (20) 仮 Il faut [現] voir, dit Colomba avec un sourire ironique. (対訳書 p.350)
科 Aghju da vede [迂未], disse Culomba cù una risa schirzosa. (対訳書 p.351)
伊 Si porta [現] provare! — riposte Colomba con ironia. (伊訳書 p.195)
「確かめないといけません」とコロンバが皮肉な微笑をうかべて言った。

最後に、科の迂言的未来形が仮の条件法現在形に対応している例をみよう。

- (21) 仮 Votre jolie redingote serait [条現] en pièces au bout de deux jours si vous la portiez dans le maquis. Il faut la garder pour quand viendra [单未] Miss Nevil. (対訳書 p.152)
科 Issa flacchina cusì bella si n'hà da andà [迂未] à strappellu s'è vo a purtate dui ghjorni in la machja. Ci vole à tene la par quand'ella vinirà [单未] Miss Nevil. (対訳書 p.153)

⁹ Casta (ad loc.) は、「**Hà da vene un ghjornu ch'ellu s'hà da lascià tuttu.**」（いつの日か、彼がすべてを投げ出す日がくるだろう）というコルシカ語の迂言的未来形の文を、「**Un jour viendra où il laissera tout.**」というフランス語の単純未来形の文に対応させている。フランス語の迂言的未来形の使用条件については、渡邊 (2013)(2014) を参照されたい。

¹⁰ <*avè da* + 不定法>が、その原義であった《義務》を標示している例としては、ほかにもつぎの例文をあげることができる。

仮 Voici ce que j'ai à vous dire... (対訳書 p.224) 科 Eccu ciò ch'e v'aghju da dì... (対訳書 p.225)
伊 Perciò che vi ho da dire... (伊訳書 p.134) 申し上げないといけないことは...

伊 **Il vostro elegante giustacuore andrà** [单未] in pezzi, dopo due giorni che l'averete portato fra le macchie. Bisogna metterlo quando **verrà** [单未] Miss Nevil. (伊訳書 p.95)
あなたのきれいなフロックコートをマキ [灌木林] に着ていくなら、2日でぼろぼろになるでしょう。それはネヴィル嬢が来られるときのためにとつておくべきです。

(21) の第1の生起に着目しよう。**仮**では条件法現在形が用いられており、後続の *si...* 節では直説法半過去形が用いられており、規範的には非現実性をあらわすとされる構文の一環をなしている。しかし、フランス語ではこの構文を用いることができる範囲が広く、「内容の現実性が不定である」程度でも使用可能である (Fauconnier 1984, p.145)。これに対し、**科**の迂言的未来形は、仮定条件のもとにおかれているとはいえ、未来時 (マキにその服を着て行って2日経ったとき) に位置づけうる内容であるがゆえに用いられている。

ところで、(21) は仮定をあらわす文であるため、やや特殊な事例のように思われるかもしれない。しかし、**科**の迂言的未来形が**仮**の条件法現在に対応している例のなかでは、仮定をあらわす文は多いようである (調査の範囲では5例中4例)。つぎの文にはそのうち2例がつづけて出てくる。

(22) **仮** Si vous faisiez arrêter mon frère, ajouta Colomba, la moitié du village **prendrait** [条現]
son parti, et nous **verrions** [条現] une belle fusillade. (対訳書 p.232)
科 S'è vo fate arrestà à me fratellu, aghjunse Culomba, a mità di u paese **hà da piglià** [迂未]
a so pratesa è **hà da nasce** [迂未] una fucilata di quelle. (対訳書 p.233)
伊 Se voi farete arrestare mio fratello — aggiunse Colomba — la metà del villaggio
prenderà [单未] la sua parte e noi **verremo** [单未] une bella fucilata. (伊訳書 p.137)
「あなたがわたしの兄を逮捕させるなら、村の半分が兄の味方をするでしょう。そして、ものすごい撃ち合いを見ることになるでしょう」とコロンバはつけくわえた。

のことからもわかるように、仮定文のなかで、フランス語は条件法を相対的に好む言語であるのに対し、コルシカ語では、なんらかの条件のもとにあることであっても、未来時に想定されるできごとであることから、迂言的未来形を用いることができる。

なお、(21)、(22) はいずれも、「そんなことをしたら、悪い結果が生じる」という《脅し》の言語行為を果たす発話であることが注目される。そのことは一見、「コルシカ語の迂言的未来形はもっぱら時制的である」とする本稿の仮説と両立しないように見えるかもしれない。しかし、仮定さえ満たされれば自動的に帰結が出てくるかのような言いかけのほうが、仮定された行為を思いとどまらせるための《脅し》には効果的であり、その意味でコルシカ語の時制的な迂言的未来形は《脅し》に適しているのである¹¹。

¹¹ 実は現代のフランス語・コルシカ語では仮定のもとの帰結をあらわすことを主な用法のひとつとする条件法も、その起源である俗ラテン語の *cantare habebam* 型迂言形の段階ではむしろ、《義務》や《必然性》をあらわしていた(cf. 渡邊 2019)。単独で必然性をあらわしていた *cantare habebam* 型迂言形が、やがて仮定と帰結の関係の必然性を標示するようになったのである。このことと、現代コルシカ語の迂言的未来形とのあいだには、条件文中での用法への移行のなかでの

5. コルシカ語における前未来形の選好

前未来形に関して、1点だけ目につくところがある。それは、コルシカ語のほうがフランス語より前未来形を好むということである。今回の調査の範囲内でも、フランス語のみで前未来形を用いている例は2例しかないのに対し、コルシカ語のみで前未来形を用いている例は27例と、10倍以上もある。以下では、コルシカ語のみで前未来形を用いている例をいくつか見ておきたい。

まず、**科**の前未来形と対応している**仏**のことなる形式でもっとも多いのは、複合過去形である。

- (23) **仏** Et qu'a-t-il **fait** [複過] enfin ton bandit ? Pour quel crime s'est-il **jeté** [複過] dans le maquis ?
(対訳書 p.146)

科 È ch'avarà po **fattu** [前未] u to banditu ? Par chì malfatta **avarà pigliatu** [前未] a machja ?
(対訳書 p.147)

伊 E che ti **ha fatto** [複過] infine questo tuo bandito ? Per qual delitto **si è buttato** [複過] alla campagna ?
(伊訳書 p.91)

「おまえの言う悪漢はなにをしたんだ？ なんの罪でマキ [灌木林] に逃げ込んだ？」

(23) の**仏**では過去のできごとに関する疑問であるため、叙事的に複合過去形が用いられている。それに対し、**科**では、できごとの過去性は完了の助動詞 **avè** によってあらわされており、疑問にともなう『推量』(3.2節参照) が未来形態素 **-r-** によってあらわされている。それらふたつの要素がかけ合わさったのが前未来形である。このことから、**科**においては、前未来形にも、単純未来形でみられた特徴が反映しているといえる。

つぎに、**科**の前未来形に**仏**の現在形が対応している事例をみよう。

- (24) **仏** Vous avez beaucoup voyagé, monsieur, dit-il, à ce qu'il paraît. Vous **devez** [現] avoir oublié la Corse... et ses coutumes.
(対訳書 p.58)

科 À quantu pare ete viaghjatu assai, o sgiò della Rebbia, disse. **Averete** ancu **smenticatu** [前未] a Corsica... è i so usi.
(対訳書 p.59)

伊 Voi avete viaggiato molto, signore, a quel che pare — gli disse — **averete** necessariamente **obliato** [前未] la Corsica e i suoi costumi.
(伊訳書 p.45)

「あなたはたくさん旅をされたそうですね」と彼は言った。「それで、コルシカと、その風習をお忘れになったのでしょうか」

(24) では、『推量』によってえがき出されている内容は、事態そのものとしては『結果残存型の完了相』(Comrie (1974) のいう perfect、Novakova (2001) のいう accompli) を帶びているが、**仏**ではその完了相は現在形の法動詞 **devoir** に後続する不定法を複合形(完了形)にすることによって示されている。それに対し、**科**で前未来形が用いられている理由は、前の例(23)と同様、できごとの完了相をあらわす助動詞 **avè** と、『推量』

意味変化において、類似性がみとめられる。

をあらわす未来形態素 -r- がかけ合わさった結果である。

最後に、**科**の前未来形に**仏**の半過去形が対応している事例をみよう。

- (25) **仏** Mais avait [半過] -il réellement envie de venger son père à la corse ? (対訳書 p.118)
科 Ma avarà po avutu [前未] da veru a voglia di vindicà u babbu ? (対訳書 p.119)
伊 Ma ha [現] egli davvrero la volontà di verdicare suo padre alla corsa ? (伊訳書 p.78)
彼はほんとうにコルシカ式に父親の仇討ちをしたがっていたのですか？

(25) でも、**科**で前未来形を使っている理由は、(23)、(24) と同様で、完了相（ただし、ここでは過去指示に近い）をあらわす助動詞 *avè* と、《推量》をあらわす未来形態素 -r- の組みあわせである。一方、**仏**で半過去形が用いられているのは、過去のことがらを想起・回想する際に一般的な現象であり、渡邊 (2021, pp.280 sq.) で指摘した、フランス語が他のロマンス諸語より半過去形を好む言語であることにつながっている。

6. 結論

本研究では、フランス語とコルシカ語の未来諸時制を対照することで、それらの特徴を明らかにした。

単純未来形に関しては、フランス語では未来時指示の機能が強く、一見モダールに見える用法においても、なんらかの未来時との関連づけが可能なときによく用いられるのに対し、コルシカ語ではモダールな特徴が強く、全般的に《推量》(conjecture) を示すことができる。

迂言的未来形についてはいっそう大きな違いがある。コルシカ語ではなんらかの未来時指示があれば広く使えるのに対し、フランス語では発話時とのかかわりが強くなれば使えない。

これらのことから、それぞれの言語における単純未来形と迂言的未来形のおもな相違を、つぎのようにまとめることができる。フランス語では両時制とも未来時指示を基本とするが、単純未来形が発話時から断絶した未来時、迂言的未来形は発話時と連続的にとらえられるような未来時を指示する。コルシカ語では単純未来形の基本的意味はモダールであり、迂言的未来形は未来時指示の時間的な意味をになうという形で役割分担をしている。

また、コルシカ語では過去の事態への《推量》をあらわす前未来形がフランス語よりも好まれることも判明した。

参考文献

- Abouda, Lofti et Marie Skroveč (2017) : « Du rapport micro-diachronique futur simple / future périphrastique en français moderne », *Corela*, 21, pp.1-25.
Baylon, Christian et Paul Fabre (1987) : *Grammaire systématique de la langue française*, Nathan.
Casta, Santa (2003) : *La syntaxe du corse*, CRDP di Corsica.
Comrie, Bernard (1974) : *Aspect. An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*,

Cambridge University Press.

- Fălăuș Anamaria et Brenda Laca (2014) : « Les formes de l'incertitude. Le futur de conjecture en espagnol et le présomptif futur en roumain », *Revue de linguistique romane*, 78, pp.313-366.
- Fauconnier, Gilles (1984) : *Espaces mentaux*, Minuit.
- Gaggioli, Ghjaseppiu (2012) : *La langue corse en 23 lettres*, Albiana.
- Ippolito, Michela et Donka F. Farkas (2021) : « Assessing alternatives : the case of the presumptive future in Italian », *Linguistics and Philosophy*. <https://doi.org/10.1007/s10988-021-09338-7>
- Kronning, Hans (1996) : *Modalité, cognition et polysémie : sémantique du verbe modal devoir*, Acta Universitatis Upsaliensis.
- 三宅知宏 (2010) : 「「不定推量」と「質問表現」— "ダロウ"をめぐって (2)」『鶴見大学紀要 第1部 日本語・日本文学編』47, pp.57-75.
- Novakova, Iva (2001) : *Sémantique du futur. Étude comparée français-bulgare*, L'Harmattan.
- Popescu, Mihaela (2015) : « Le ‘futur épistémique inférentiel’ dans les langues romanes. Une approche contrastive », *Revue de Sémantique et Pragmatique* 38, pp. 59-75.
- Squartini, Mario (2004) : « La relazione semantica tra futuro e condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.
- Squartini, Mario (2008) : « Lexical vs. Grammatical evidentiality in French and Italian », *Journal of Linguistics*, 46, 5, pp.917-947.
- Togeby, Knud (1985) : *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2009) : 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 55, pp.123-144.
- 渡邊淳也 (2012) : 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 61, pp.191-234.
- 渡邊淳也 (2013) : 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 63, pp. 69-106
- 渡邊淳也 (2014 a) : 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2014 b) : 「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房, pp.177-213.
- 渡邊淳也 (2014 c) : 「前未来形のモダールな用法について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 66, pp.35-56.
- 渡邊淳也 (2019) : 「フランス語の単純未来形と条件法—叙法的対立とその源泉—」『言語・情報・テクスト』東京大学, 26, pp.63-78.
- 渡邊淳也 (2021) : 「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト」益岡隆志監修『[研究プロジェクト] 時間と言語』ひつじ書房, pp.261-289.
- 渡邊淳也 (2022) : 「フランス語とコルシカ語における条件法の対照研究」『発話言語学研究』1, pp. 40-62.
- 渡邊淳也・小川紋奈 (2017) : 「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明編『諸言語における TAME の発現と認知モード』筑波大学 TAME 研究会, pp.59-82.

文例出典

Prosper Mérimée : *Colomba*, versione bislingua francese-corsa, tradutta pè Ghjuvan Battistu Paoli, CANOPÉ [=Réseau de création et d'accompagnement pédagogiques] 2016.

Prosper Mérimée : *Colomba*, versione italiana, tradotta per Ottone Bacaredda, Head & Line 2014.

(わたなべ じゅんや / 東京大学)